

ほう まん ざん やま ぶし
宝満山の山伏



宝満山入峯絵巻(部分/筑紫野市指定有形文化財)

江戸時代、宝満山には「宝満二十五坊」といわれる山伏(修験者)が住んでいました。

現在キャンプセンターがあるところは、「座主跡」ともいいますが、ここに宝満山伏のトップ「座主楞伽院」が、その下の東院谷に十六坊、百段ガンギの両側に展開する西院谷に九つの坊がありました。

坊は寺であり、山伏の住まいであり、その家族や弟子たちも住んでいました。また上宮参拝や七窟巡りなどをする信者の宿泊施設でもありました。これら坊には大石村から大谷尾根道を通って生活物資が運ばれていました。

山伏は、山で厳しい修行をすることによって仏の子として生まれ変わり、人々を救う存在になることを目指しました。東院谷にある法城窟は真つ暗な窟の中の岩盤に、宝満山の祭神「玉依姫命」



パンの梵字がある福城窟(筑紫野市大石)

の本地仏「十一面観音」と思われる仏像が線刻されています。この窟に籠もり一心に神仏に祈る修行者の姿が彷彿とします。

法城窟の近くにある福城窟は東向きの窟で、苔むした岩面に金剛界大日如来を表す梵字が彫ってあります。この窟は求聞持窟ともいわれ、記憶力を驚異的に増強するという密教の秘法「求聞持法」が行われました。行者は食べるものも制限され、早にも大雨にも水量が一定で、応神天皇の産湯にも使ったという山中一の清水「益影の井」を毎日汲み立てては虚空蔵菩薩に供え、明けの明星を拝し、日蝕か月蝕に結願するという百日間の厳しい修行をしました。

このように単独で行う修行もありましたが、山を挙げての最大の修行は「峰入り」でした。

山伏が本尊と仰ぐ大日如来には金剛界と胎蔵界という相対する二つの世界があります。金剛界曼荼羅は、九つの区画に区切られた仏の世界で、大日如来の智的構成を示し、金剛不壊といわれる堅固な悟りや智恵を表しています。金剛界は陽であり、父であります。胎蔵界曼荼羅は、八葉の蓮華の中央に座す大日如来を中心に仏の世界が波紋のように広がります。現象界の理法を表し、母の慈悲を表しています。

宝満山は金剛界の山、一方の胎蔵界は英彦山です。両山の距離は130km、その間に「四十八宿」という礼拝する場所が置かれました。最も重要

な宿は小石原じんぜんしゆくの深仙宿で、両界の境目となる重要な行場でした。修験道のメッカ、紀伊半島おおの大峯奥駈道みなおおくがけみちでも、深仙宿は大峯山中最も秘所といわれ、七度生まれ変わって大峯山中で修行した修験道の開祖役行者が、その三生えんのまうじやまで使って造ったと伝えられています。

宝満山と英彦山の間に入峰道も697年に役行者が開いたと伝え、また役行者は701年に再来し、宗像の孔大寺山こうだいじさんを胎蔵界とする三部習合之峯を開いたとも伝えています。

しかし実際の所、宝満山から大根地山、夜須高原いったまの五玉神社ごしよさん、古処山、屏山、馬見山、嘉麻峠、不動岳、二又山を経て小石原深仙宿に入り、糸ヶ峰の難所を越えて、愛法窟あいぼうくつでの出生灌頂、さらに大日岳、釈迦岳、岳滅鬼岳から彦山に至る峰道が開かれたのは平安末期頃、団体での入峰にゅうぶぎやうが行われるようになったのは鎌倉時代以降、この地で修験道が盛んになったのは蒙古襲来が大きな契機と考えられます。

宝満山-彦山間の入峰は「大峯」といわれ、宝満山伏は秋峰として行い、彦山山伏は春峰、夏峰の二季、入峰修行しました。入峰修行の中心道場は、彦山ひなやまは備宿、宝満山は獅子宿ししのしゆくで、実際に峰に入るまでの一ヶ月以上ここで前行を行いました。この二つの宿は峰々を隔てて向き合っていました。獅子宿はキャンプセンター水場の下にありましたが、明治維新で修験道が廃止されると、壊され谷底に突き落とされたと伝えられています。

宝満山-孔大寺山間の入峰は「葛城峯」といわれました。これも大峯同様、紀伊半島の修験の霊場に倣ったものです。葛城峯は春峰修行として行われ、元禄12(1699)年に再興したと言われます。宝満山を出ると三郡縦走の峰道を若杉山に至り、久山の首羅山から犬鳴山へ。西山連峰は東に下り、峰に戻っては西に下り、また峰に戻るといふ苦行をしながら麿山から釈迦岳、戸田山、孔大寺へ至ります。帰路は宗像の鐘崎から宗像大社、香椎宮、宮崎宮など有名所をまわり、博多では櫛田神社で町人のために、福岡城に入っては藩主のために護摩祈祷をしました。

食料の調達、臨時の行場の建設など、入峰には沿線住民の協力が不可欠でした。皆が喜んで



東院谷の薬師堂跡(筑紫野市本道寺)

それをしてくれたのは、山伏が修行によって身につけたマジカルパワーで、人々の苦しみに応えていたからでしょう。

春秋の峰入りの他に、夏に「大巡行おおめぐりぎやう」が行われました。昼は東院谷の薬師堂で写経や読経をし、夜間、宝満山中の拜所に花しきみ(樺の枝)を供えてまわるのです。「天台の修法」とも「心蓮の遺法てん」ともいわれています。心蓮は宝満山の開山で、天武天皇の時代、常に樺あ・闕伽水をもって山中で修行はくほうし、白鳳2年2月10日の辰の刻ぼていいわ、馬蹄岩の所で玉依姫の神霊に出逢ったと伝わります。

大巡行では薬師堂から女道を通り大南窟まで下り、そこから一氣に中宮に登って、山名の由来ともいわれる竈門岩、玉依姫の騎った龍馬の足跡がある馬蹄岩、そして上宮を拝し、仏頂山の心蓮上人の御墓で日の出を迎えるのです。この行ではまた、季節柄、凶作を引き起こす害虫除けの祈祷もなされました。

明治のはじめ山伏は山を追われますが、昭和57(1982)年、心蓮上人の1300年遠忌おんきを記念して宝満山修験会が結成され、入峰、採燈大護摩供が復活しました。

毎年、若葉薫る5月、山伏たちが宝満山に帰ってきます。(森 弘子)

参考文献

栗原隆司・森弘子「祈りの山宝満山」海鳥社 2011

森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』太宰府顕彰会 2008